

《研究ノート》

ドブロリユーボフにおける 国民文学像

藤井 一行

(127) 研究ノート

一九世紀ロシアでは文学批評上の価値基準のひとつとして「国民性 *национальность*」という概念がしばしば用いられ、そのような価値を実現している文学作品や作家に「国民的 *национальный*」という形容語が冠せられる。この概念は多くのばあい、具体的な社会的・文化的状況にかかわる一定の問題認識を媒介として発想され、一定の問題状況のもとで要請されていると意識された国民文学というものの内容や性格をあらわしており、その内容、そこに表現される国民文学像は一九世紀を通じてはなはだ多様である。ロシアに「国民性」という概念をはじめて導入したのはP・ヴァーゼムスキー（一七九二—一八七八）であるといわれるが、それはフランス語の *nationalité* の訳語としてであった。一九世紀の前半には「国民性」は主として民族の独自の性格を意味する概念として用いられるが、五〇年代にはチェルヌイシェフスキー、ドブロリユーボフによってまった

く新しい内容がこの概念に導入され、それが主要な意義をかくとくするにいたる。しかし、一九世紀前半においても「国民性」概念は決して一義的ではない。ことに、民族の独自の性格を具体的に民族のいかなる部分のいかなる資質にみいだすか、文学における「国民性」の実現をいかなる方途ではかろうとするか、の諸点に注目すると、論者によって見解は一樣ではない。デカブリスト文学者のアレクサンドル・ペストゥージェフ（一七九三—一八三七）は『ロシアにおける旧新の文学の概観』（一八二三年）、『一八二四年および一八二五年初頭のロシア文学の概観』（一八二五年）、『N・ボレヴォイの長編小説「主の墓のかたわらにて」について』（一八三三年）などの諸論文で、フォンヴィーゲン、ジェルジャヴィン、クルイローフ、グリポエードフの諸作品に「国民性」をみいだし、あるいはそれらの作家や作品を「国民的」と評している。このばあい、ペストゥージェフは「国民性」のもとに主として言語・精神・習俗などの面でのロシア民族固有の諸特徴の文学における発現を理解している。ペストゥージェフにおける「国民性」概念は当代のロシアの文化・文学状況についての一定の問題認識を媒介としている。『一八二四年および一八二五年初頭のロシア文学の概観』で、彼は「われわれは他国人に育てられ、ミルクとともに無国民性（*бессапоучность*）と異国のもののみへの驚嘆を吸いこんだ」とのべ、「わが国には批評はあるが文学はない」と断じている。そこから推察しうるように、彼は当代のロシアの文学界が総じて獨創性に乏しく、自主性に欠けていると見なし、

その事態が主として外国文化の盲目的模倣によってもたらされたと考える。しかして、ペストゥーージェフは、状況をことにする異国の文化への盲従をやめ、ロシア文学が「自己の軌道にのり」、「ロシア的に書く」ことを期待する。かくして、ペストゥーージェフにおいては、外国模倣から解放された自主的な国民文学というものを民族の独自のなものの表現によって形成しよう⁽³⁾と志向していた、と言いうるのである。しかし、同時に注意されるべきは、デカブリストたる彼はルイレーエフと同様に、その市民的愛国主義の見地からする理想的資質をロシア民族の独自性としてとらえ、もっぱら民族の英雄的過去を題材として主観主義・ロマン主義的方法によってその国民文学を創造せんと意図したようにみえる、ということである。

アレクサンドル・プーシキン(一七九九—一八三七)は、文学における「国民性」というものを、自然的・社会的・宗教的諸条件によって形成される民族の独自の習俗・精神・感覚の文学へのおのずからなる発現として理解する(『文学における国民性について』、一八二五年)。彼は、自民族の生活に題材をもとめたり、外国語の使用を避ければ文学の「国民性」は達成されるとする見解には反対し、他国に題材をとつても、外国語を用いても作者を通して「国民性」は発現すると主張する。しかし、プーシキンにおいてはその「国民性」概念や「国民性」論は、ペストゥーージェフやペリンスキーのばあいとことなり、特定の問題認識を媒介してはいないようにみえる。彼は、右の二人のように自国に文学が不在だとは考えないし、異国文化へ

の盲目的な依存をみいだしてもしない。むしろ、自国の文化の発展には模倣すらも必要だと考えているきらいがある(『わが文学の歩みをおくらせている諸原因』、一八二四年)。プーシキンは文学の自主性や独自性というものをことさらに必要視することをしない。プーシキンは、「国民性」はおのずと文学作品ににじみでる普遍的資質であるとしか考えていない。したがって、彼は外国依存から解放された自主的な国民文学の形成という志向はいだいていなかったように思われる。

しかし、プーシキンは別の意味での国民文学の形成をもとめ、みずからその実現のために努力する。それは、彼のことばをかりれば「シェイクスピア方式」にもとづく文学、すなわちリアリズム文学にはかならない。プーシキンは『ボリス・ゴドゥノフ』への序文草稿(一八三〇年)や『国民的戯曲論』(一八三〇年)において、ラシーヌの「宮廷的」悲劇にしばしばシェイクスピアの「国民的」悲劇を対置し、後者をロシアに確立することの重要性を主張する。このばあいの「国民的」の意味は彼が『文学における国民性について』においてのべたそれとは内容をことにし、もともと国民大衆のあいだで生まれ、国民大衆やそのことばを自由に作品にもりこみ、故に国民大衆にも理解され、享受される、といった意味である。しかし、このさいのプーシキンの主張の核心はなによりも創作方法の問題にあり、彼の言う「国民的」悲劇の本質は今日のいわゆるリアリズム(彼は「シェイクスピア方式」ないし「真のロマン主義」と呼んでいる)にあったと考えなければならぬ。『ボリス・ゴ

ドゥノフ』はプーシキン自身のそのような国民文学の創造への最初の実験であった。

ヴィサリオン・ペリンスキー（一八一—一八四八）においても、文学における「国民性」という概念は彼がその批評活動で一貫して重要視するもののひとつである。彼は「国民性」を二つの次元でとらえる。第一は、民族の既成の特殊的資質（生活・思考・感覚）を意味し、第二は、彼が「絶対的国民性」と名づける（『文学的空想』）もので、ロシアにはいまだ形成されていないところの未知の民族精神（「ロシア的理念」とかロシア独自の思想）を意味している。文学の「国民性」は、したがって、第一に、既成の民族の生活を反映するときに達成される。このさい、注意すべきことは、ペリンスキーが民族の生活の反映はあくまでリアリステックになされねばならない、と力説していることである。題材や表現手段に力点をおき、方法を顧慮しない作品は「国民的」ではなく「平民的」であるとして彼はこれをしりぞける。第二に、文学の「国民性」は、教育の普及によってやがてロシアに「絶対的国民性」が形成されるときに、文学作品の対象や内容にかわりなくおのずと実現される。そして、ペリンスキーにおいては前者の「国民性」は後者を欠く特殊状況下での当面の代替物として意味づけられている。ペリンスキーの「国民性」概念もベストウーヅエフのばあいと同様に、主としてピョートル改革以降のヨーロッパ化の過程で生じ、彼の時代にも存続しているとされるところの文学界の問題性——模倣性や無性格性という——の認識および文学に

おける自主性の確立への志向に発しているとみられる。そして、ペリンスキーもまた自主性の確立の方途を民族の独自のものの発現にもとめようとするのである。彼の「国民性」論は、自主的、独自のであることを基本的性格とするところの国民文学の形成への要求を意味するのであり、その「国民性」概念の二種の内容は、同時に、創造さるべき国民文学の二つの次元での内容を意味している、と考えなければならぬ。

ニコライ・ドブロリューボフ（一八三六一—一八六一）は「国民性」概念にまったく新しい内容を導入する。「国民性」は従来と同様に民族の独自の性格をも意味するが、それ以上に、国民的立場とも言うべきものを意味するにいたる。ドブロリューボフは『A・V・コリツォフ』なる評伝（一八五八年）においてコリツォフを「偉大な国民的詩人」と呼ぶが、それはコリツォフが「ロシア的な魂をもち、ロシア的な感情をもち、国民の生活に親しく通じているまったくロシア的な人間」であるがゆえのみならず「国民の生活を生き、国民の生活に完全な共感をもった人間」であるがゆえである（140—141）。ドブロリューボフの「国民性」概念の新しい内容は右の後者の部分によって示唆されている。

ドブロリューボフはコリツォフがはじめて「真のロシアの間、わが平民の真の生活をありのままに示した」とのべる（141）。ここで彼は「真のロシアの人間」が「わが平民」にあるという見解を示している。すなわち、国民大衆こそが民族的に

独自の資質を真に体现していると彼は考えるのである。『ロシア文学の発展への国民性の参与の程度について』(一八五八年)においては、ドブロリューボフは次のようにのべる。

「根本的ロシアは、賢人諸君、われわれや諸君にあるのではない。われわれが立っていられるのは、ひとえに、われわれの足の下に固い地盤があるからだ——それは、すなわち、真のロシアの国民である。われわれは自分自身としては、偉大なロシア国民のまったくとるにたらない一部をなしているにすぎない。」(II, 257) (圈点引用者)

このように、ドブロリューボフにおいては「国民」とは、民族の圧倒的部分を構成し、民族の生存を支えるところの、しかし民族の内部にあっては被支配的地位におかれているところの人々をなによりも意味し、かつ、そのような国民大衆こそが民族の真の代表者としてとらえられている。そして、ドブロリューボフにとって重要なことは、人類ないしヨーロッパ世界のなかでのロシア民族の運命よりも、民族内部での、民族を代表するとされる勤労国民大衆の運命にほかならない。

ドブロリューボフは『ピョートル大帝の治世の初年』(一八五八年)や『ジェレブツォフ氏著のロシアの文明』(一八五八年)などの諸論文でピョートル大帝の改革について論じている。彼はこの改革が「国民の現実的要求と志向」によってなされたものにとらえ(III, 36)、それが国民の眼を開かせ、世界にはロシアとちがった「正しく規定された生活関係があることを気づかせ、その撰取にとりかからせた」点に大きな意義を認

める(III, 119—120)。したがって、彼は、ピョートル改革がロシアの民族的利益に反し、ロシアの歴史的発展を阻害したといったたぐいのスラヴ主義者の見解をしりぞける。もっとも、ドブロリューボフも、このヨーロッパ化の改革の過程での皮相性、模倣性の発生という事実を否認はしない。しかし、彼はそれがむしろ必要なことであったと考える(III, 283)。また、ペリンスキーとちがってドブロリューボフは、ヨーロッパ依存が自己の時代にも存続しているとは考えない。もっと正確に言えば、かりにそうした事態の存在を認めていたとしても、そのことを問題視はしない。したがって、彼は、ロシア国民が文化的外国依存からの解放、文化形成における民族的主体性の確立という課題に面しているとは考えない。彼には、チェルヌイシエフスキーと同様に、その意味ではロシアの文化・文学はすでに「国民的」に、すなわち、自主的かつ独自のになっているという判断がおそらくあったと思われる。ドブロリューボフは、愛国主義の重要性を強調するが、彼における「真の愛国主義」とはなによりも「自分の国のために力をつくそうという願望」、「できるかぎり多く、できるかぎりよく善をなそうという願望」を意味している(III, 284)。自己の利益のために同胞を搾取し、欺むき、害をなす人間は口先でいかに祖国の栄光をうんぬんしようとも愛国主義者とは認められない、と彼は説く(III, 286)。このように、ドブロリューボフは、民族の未来や運命というものを、世界における独自の存在という次元においてはなく、民族を真に代表する国民大衆のいわば幸福の問題として

とりあげるのである。そして、この問題こそがドブローリユーボフの最大の関心事であった。

文学にたいするドブローリユーボフの要求もこうした問題意識から提出される。彼は『闇の王国における一筋の光』(一八六〇年)において、文学作品の価値の尺度は、それが「一定の時代と国民の自然的志向」をどれだけ表現しているか、ということであるとべる(VI, 307)。また、文学はそもそも「その意義がプロバガンダに存し、その価値が、文学がなにをいかにプロバガンダするかによって決せられるところの奉仕的な力」であり、プロバガンダとは「人類の先進的活躍者によって発見されたものを大衆の意識にもちこみ、人々のなかにまだほんやりとあいまいに生きているものを人々に明らかにし、説く」ことである、と彼は考える(VI, 309-310)。したがって、ドブローリユーボフは、文学が国民大衆の現実的要求を表現・反映することにも国民大衆のいわば潜在的な志向の自覚・意識化を促すことをその最大の課題として提起している、と言えよう。

ドブローリユーボフの「国民性」概念は以上のような問題認識と課題意識に発している。すでにのべたように、彼は国民大衆の生活をいわば共感的に生きること、「国民的」文学の標識をみていた。しかし、文学の「国民性」を成立せしめる諸条件はそれのみにはつきない。彼は『ロシア文学の発展への国民性の参与の程度について』という論文で、古代からゴゴリ時代に至るまでのロシアの文学に彼の観点からする「国民性」がいかに発現していたかの点検を試みる。

彼は、ロシアにおいて文学が国民大衆と無縁なものであることを問題とする。第一に、人口の九九%以上を占める人々が新聞・雑誌を読むことができない。それは文盲によるだけでなく、国民大衆が自己の労働を犠牲として読者や作家の生命を支えなければならぬという理由による。したがって、このような状況のもとでは「国民的作家」という呼称は無意味である、と彼は説く(II, 226)。だが、ドブローリユーボフによれば、文学は国民大衆がこれを読みえないという意味で国民大衆に無縁であるだけではない。第二に、文学作品の内容そのものも国民大衆に無縁なのである。そのさい、彼は作品における見解、志向、共感、見地が国民大衆のそれでないことを念頭においている(II, 228)。したがって、ドブローリユーボフは国民大衆に真に享受される作品を「国民的」と見ようとしている。だが、国民大衆に現実読まれるという意味での「国民性」は、国民大衆がそのような可能性をかちとらないかぎりには実現されない。したがって彼が問題とするのは主として文学の内容にかかわっての「国民性」である。この面での彼の所論を具体例によって観察してみよう。

ロシアの一八世紀の文学にはドブローリユーボフはまったく「国民性」を発見できない。国民大衆の出身たるロモノソフは国民大衆に共感せず、庇護者のために詩作する。彼がときに国民大衆を侮蔑せぬよう説いたとしても、それは抽象的な徳として、「国民の要求への深い心からの共感」のゆえではなかった(II, 252-253)。さわゆる「風刺的傾向」も「国民的利益

の理解にまで高まらなかった」と、ドブローリユーポフは見る (II, 267—270)。ブーキンについては「ロシアの国民性の形式をきわめてみごとに会得した」(圈点引用者)が、「国民性の内容」には欠けていたとし、彼は次のようにのべる。

「国民性というものを、われわれは所与の地方の自然の美を描き、国民から聞きとった的確な表現を用い、儀式、慣習などを忠実に提示する能力としてのみ理解するのではない……真に国民的な詩人になるためには、国民の精神に徹し、その生活を生き、国民と肩をならべて立ち、階層的偏見、書物的教養のいっさいをすてて、国民があわせもつところの素朴な感情のすべてを追体験する必要がある。」(II, 266) (圈点引用者)

ゴーゴリはそのすぐれた作品で「国民的見地」に接近しているが、それは「芸術家的な手さぐり」によるものであって自覚的にはなかった (II, 271)。こうして、ドブローリユーポフは、コリツォフとレールモントフを除けばロシア文学は「国民の生活」「国民の志向」の表現になるといふ使命を果たしえなかつたと断定する (II, 263)。しかし、コリツォフについてもドブローリユーポフはペランジェと対比してその「見解の全面性」の欠除、「平民階級」の「一般的利益」からの隔絶、「俗世的要
求」の固執などに不満を示している (II, 263)。論文『ペランジェの歌』(一八五八年)でドブローリユーポフは、コリツォフに欠けているとしたものが「国民と、国民の真の幸福へのものとも清く正当な愛の人道的感情」であることを示唆している。ウクライナの農奴出身の革命的詩人タラス・シェフチェンコが

『コプザリー』を発表したとき、彼はその書評でシェフチェンコを「完全に国民的な詩人」と呼び、ロシアには彼に比肩する詩人がなく、コリツォフすらおよばないとのべる (VI, 172) が、それもドブローリユーポフが国民大衆の社会的自覚を促すという契機をシェフチェンコにみいだしたからだと思われる。

以上から知られるように、ドブローリユーポフの「国民性」概念は、国民大衆のありのままの生活や関心、要求、思考や感情を共感的・追体験的に表現することだけでなく、ヒューマニズムというより高い立場から国民大衆の要求・利益・関心にこたえること、具体的には、隷属からの国民大衆の自己解放、社会の民主主義的変革の必要性への自覚を喚起することを意味している、と言えよう。かくて、ドブローリユーポフは勤労大衆の護民官として、国民大衆に奉仕することをその基本的性格とするところの国民文学の創造という要請をロシアではじめて提出したのであった。⁽¹⁰⁾ このような国民文学はいうまでもなくリアリズムを方法上の不可欠の条件としなければならなかった。このさい、注意すべきは、彼は国民大衆を理想化、美化し、その欠陥に眼を閉ざすことを国民大衆への侮蔑ととらえ、どこまでもありのままにこれを描出しなければならないと力説している点である (S・T・スラヴチンスキーの中編小説と短編小説、一八六〇年)。

ドブローリユーポフが期待した国民大衆に奉仕するところの国民文学の実現は、私見では一九世紀末のマクシム・ゴーリキーの登場に俟たなければならなかった。しかし、国民大衆に現実

に広く愛読されるという事態を含めた意味での国民文学の出現は明らかに将来の課題として残る。

- (1) アレクサンドロフ著、わが国文学の発展と国民文学の出現 (Б. Тома-шевский, Пушкин и Франция. Сп., 1960, стр. 11—12.)
- (2) Д. Тимофеев, Проблемы теории литературы, Учен. зап., 1955, стр. 156.
- (3) Полярная звезда, издательство А. Бесружьевым и К. Рылевым, отв. ред. В. Базанов, 1960, АН СССР, стр. 488.
- (4) Там же, стр. 492.
- (5) А. Пушкин, Полное собрание сочинений, Библио-тека «Огонек», 1954, т. V, стр. 23—24.
- (6) Там же, т. V, стр. 11—12; т. IV, стр. 112.
- (7) Александровскийにおける国民文学像については筆者はかつて書いたことがあるので、ここでは詳述を避ける(「アレクサンドロフの『国民性』論」、『一橋論叢』第四十五卷第三号所収)。

(8) Н. А. Добролюбов Собрание сочинений в девяти томах. ГИХЛ, т. I, стр. 451. 以下、本文では同版のテキストに依り、巻と頁をそれぞれローマ数字とアラビア数字で()内に記す。

- (9) Н. Чернышевский, Заметки о журналах, май 1856 г., Полное собрание сочинений, ОГИЗ, т. III, стр. 654.
- (10) Александровскийの『チャーチクの手紙』(一八四七年)から明らかのように、「ロシアの民主的変革のたたかい」と国民を自覚させることを文学の重要な任務として提起している。しかし、彼はそのような任務をもつ文学を国民文学として意識してはいなかった。チェルヌイシェフスキーはプロクリューホンとは同様の国民文学像をいっていたと思われるが、その点での論及が乏しい(『ロシア文学のユーゴリ時代概観』第九論文、『雑誌寸評』一八五六年五月など参照)。

(一橋大学大学院元学生)